
Swallowtail Butterflyスワロウテイル・バタフライ

tokujirou

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S w a l l o w t a i l B u t t e r f l y スワロウテイル・
バタフライ

【Nコード】

N 1 0 6 5 K

【作者名】

t o k u j i r o u

【あらすじ】

由木ヒナは心に闇を抱えながら日々を送る。それは時に他の女子が感じる痛みや鬱陶しさ、苛立ちや懊悩などとは異質なものだ。この作品は、某企画用に書き下ろした物を分割したものです。

第1話（前書き）

短期連載ですので、お気軽にお読みください。

第1話

「ヒナ、帰り何処か寄ってく？」

「ううん、あたし早退する」

「なんで？」

「アレ始まった」

「ああ、じゃあしんどいね」

お昼休みの廊下は喧騒で溢れている。

体育館に続く渡り廊下は途中で分かれて学食へ続き、午後の陽射しが眩しいくらいにコンクリートで弾けていた。

あたしと沙弥は渡り廊下の少し錆びた手すりにもたれかかって頬杖をつく。

中庭に植えられた紫陽花が日陰で鮮やかな彩を見せても、あたしの憂鬱な日々は始まったばかりだ。

沙弥はあたしの生理が重いことをよく知っている。他の友達とはよく二日目がしんどいとか言うけれど、あたしの場合は初日が大変でピークの時にはもう身動き取れないほどの苦しみに襲われる。

それはきつと、あたしの中で燻っている想い出が疼くせいだ。

その証拠に、昔は効いていたはずの鎮痛剤を飲んでも今はあまり効かない。痛み止めでは奥底で燻る哀切な憂鬱を消し去れないからだ。

もしかしたら、精神安定剤なんかを飲んだ方が本当はよっぽど効くのもかもしれない。

「あたし、このまま帰る」

「えっ、いきなり？」

沙弥はちよつとビツクリしたけれど、あたしは前にも休み時間中に帰った事がある。

「一応、保健室行った方がよくない？」

あたしは次第に重くなるお腹に手のひらをあてる「行ってもしか

たないしさ」

沙弥に小さく手を振って教室へ戻る。

机の横に掛けて在るカバンを掴み取ったら、クラスでお喋りしていた何人かが振り返った。

「ヒナ、どうしたの？」

「うん、ちよつと、帰る」

「あ、そう」

得盛りのマスカラを瞬きさせながら睦美が軽く声をかけてくるけれど、別に引き留めたりしない。

彼女達は他の誰かに興味がある振りをしているだけで、本当は自分と男以外にたいして興味はないから。

あたしは気を紛らわすようにカバンをブラブラ揺らしながら昇降口を出ると、バス停へ向った。

初夏の陽射しが照りつけるアスファルトをゆるゆると歩く。白いアスファルトに自分の影が揺れる。

海風が運んでくる草と土の匂いを追いかけるように虚空を見上げると、干潟の野鳥が飛び立ってゆくのが見えた。

学校の近くにある大きな自然公園の谷津干潟は野鳥の宝庫だそうで、あたしたちにはやたらと見慣れた鳥も、実は稀少な絶滅種だったりする。

バス停のベンチにペタリと腰掛けて携帯を取り出すと、沙弥にメールを打った。

先生には報告してもらおう。

親に連絡されると困る。とかじゃなくて、正当な理由で帰った事だけは伝えてもらいたい。

ずる休みした時にはどう思われてもいいけれど、正当な理由があるときにはやっぱり誤解はされたくないものだ。

直ぐにバスが来たから、のろのろとバスに乗った。

ステップに脚を乗せると、下腹部に重い痛みが滲み出してきた。

昼の陽射しが窓全部から車内に注ぎ込んで、がら空きの青いシー

トが白く霞んで見える。

朝や下校時には絶対にありえないがら空きのバスは、早退者の特権だ。

入り口付近に腰掛けている杖を持ったお婆さんの横をすり抜けて、あたしは一番後ろの特等席に座ると、溜息をついて外を眺める。

特権による特権の特大ソファの上で、あたしはこれから始まる憂鬱な日々をしみじみと感じる。

毎月ほぼ決まった時期に来る憂鬱な日々。女なら当たり前の事だけれど、あたしの場合ちょっと違う。

毎月この下腹部の重苦しい痛みが訪れると、あたしは自分の中から消し去れないほろ苦い想い出と共に、憂鬱になるのだ。

それは他の女子が感じる痛みや鬱陶しさ、苛立ちや懊悩などとは異質なものだと思う。

第1話（後書き）

お読みいただき有難う御座います。
次回も宜しくお願いいたします。

第2話（前書き）

コレを執筆した時、お題で出されたテーマは『真紅』でした。
『真紅』からどんな話を思いついたか…私は変わり者です（^^）；

第2話

あたしが小学校四年生の時、家が近くて仲のよい男の子がいた。少し意地悪なところもあるけれど、小二の春にあたしが転校してきて友達がなかなか出来なかった時、帰り道で最初に声を掛けてくれたのが麻野慶太なのだ。

最初に話しかけられた言葉はもう忘れてしまったけれど。

教室の中ではあまり話しはしなかった。たぶん、他の男子がはやし立てたりするのが嫌だったのかも知れない。

時々面と向かうとオバキュウとか言われた。

オバキュウってオバQの事らしい。つまり、オバケのQ太郎というアニメキャラの事だ。

あたしは今でもそうだけれど、唇がぽっちゃりとしている。パールのグロスが似合うこの唇は、今でこそ魅力のひとつだと思うけど、小学校の時にはイヤでイヤでしかたが無かった。

そのぽっちゃりした唇が、オバQに似ていると慶太は言い出した。なんでそんな事言うのか判らなくて、あたしはただ困惑していた。だれもオバQ知らないし……それで、わざわざレンタル店でDVDとか借りてくるヤツとかいたりしてムカつくし。

実はあたしもそのパッケージを見て、初めてQ太郎のディテールを知ったんだけど。

まったく迷惑な話だった。

それでいて帰りは気が付けば慶太と一緒に帰っている。妙だ……。小学校の頃って、近づいてくると払いのけられない事が在る。ちょつとウザったい異性の存在を、ちょつと意識したりもする。

慶太もそんな存在だったのか、それとも何か特別な縁のある男の子だったのか、今では知る由もないけれど。

この日も、小三の時から仲の良い美智と一緒に校門を出ると、後ろから走って来た慶太と一緒にになった。

三人で住宅街を歩く。

高速湾岸線から吹く幕張の海風が、少しだけ初夏の香りを運んできた。

この頃は住宅街の途切れにまだ空き地があったりして、今みたいに家並みはひしめき合っていなかったような気がする。

三人でブラブラ歩いて、慶太はなんだかアホな話をして、それにウケて笑うあたしたちを見て喜んでいた。

男子ってガキだなあ。なんて思いながらも、そんなガキと一緒にいて楽しいあたしもやっぱりガキだったんだなと最近思う。

その日あたしは、午後から少し身体に違和感があった。

下腹部が重くて、なんだか少しだるくて。それでもとりあえず普通にしていた。

風邪気味で微熱があっても、あたしは平気で普通に過ごせる体質だったから。

この頃とはにかくスカートが好きで、けっこう普通にミニスカートなんかを履いていて、美智はジーンズが好きだった気がする。

この日もやっぱりスカート姿で、赤とグリーンのタータンチェックのプリーツスカートを履いていた。

イギリスの制服にあるようなチェックのスカートとブラウスにベストを合わせるのがあたしは好きだったけれど、よく考えたら、高校に入った今の制服は、まさにそんな感じだ……色はいまいち地味だけ。

丸木の棒っ杭が立ち並んでバラ線が張られた空き地には、タンポポの黄色い花が溢れかえっていた。

ヒラヒラと舞うモンシロチョウが時折陽射しの加減で白く光る。

黒い脂ぎった角材が所々に積みあがっていたのを覚えているけれど、今思えばあれは線路に使う枕木だった。

夕方にはまだ間の在る陽射しが、背中に照り付けて少し暑い。身体が妙にだるかった。あたしは再び身体の異変に気付いて立ち止まった。でも、既にそれは遅かりし事態になっていた。

内腿に奇妙な湿り気を感じたかと思ったら、生温い感触が伝う。

「おい、どうした？」

いきなり立ち止まったあたしに、慶太は言ったけど、彼は急にうるたえた。

あたしの太腿に伝う真つ赤な血を見て、彼の視線は凍りついたのだ。

「お、おい……お前、大丈夫か？」

あたしは生暖かい何かが伝う自分の内腿に触れて、慶太が近づくのを拒むように後ずさりした。

一瞬眩暈がして、息が止まりそうになった。

美智は最初どうしていいのかわらないでいたけれど、直ぐにあたしの腕に触れてきた。彼女も先月始まったらしい。それは後から聞いた話だけれど。

「麻野、あんたはあっち行って」

美智が小さな手を横にブンツと振る。

あたしと慶太の間に割り込んで、彼を遠ざけようとしてくれた。

「な、何でだよ。怪我してんのか？」

「してないよ。いいからあんたはあっち行って」

美智は今まで見た事のないような力で、慶太を突き飛ばす。

慶太は何がなんだかわからず後ろによるめいて、それでも血の滴るあたしの太腿に視線をクギ付けにしていた。

あたしの肌はとりわけ白かったから、鮮血は尚鮮明に映ったに違いない。

「大丈夫だよ。はやく家帰ろう」

しゃがみ込みそうになっているあたしの手を、美智がグイッと掴

んだ。

ポケットティッシュを取り出して、あたしの脚を伝う血液をふき取る。

「お、俺も持つてるぞ。使うか？」

慶太は美智に向ってポケットティッシュとハンカチを投げつける。

「ありがとう。でも、この事は絶対誰にも言っちゃ駄目だからね」

美智は慶太を睨むように言っただけ、あたしは顔面蒼白で何も言えなかった。

「なんだよ。言わねえよ」

彼は少し怒ったように口を尖らす。

ゆっくりと歩き出すあたしたちを、慶太は何がなんだか判らず少し遠巻きに不安な顔で見送った。

あたしは恥ずかしいのとショックなのとの両方で、頭は真っ白だった。だから慶太の顔はチラ見しただけであとは見ないようにして、俯いたまま歩いて振り返りもしなかった。

第3話

あたしの太腿を伝って流れた出血は、もちろん怪我でも病気でもない。たんなる初潮ってやつだ。

一度女子だけが集められて話は聞いていたけれど、もっと先の話しかと思っていた。

だって小学四年生なんてまだまだただの子供じゃん。

もっと胸が張り出して、腰が括れて鎖骨がクツキリと浮き出て……それからやって来るような気がしていた。

妙に胸がおつきくて既にブラをつけているらしいという噂のユミなんかは、いかにも早く来そうだけれど、まさかあたしにもそれがやって来るなんて……前日だってなんの兆候もなかったし。まるで寝耳に水ってやつだ。

その晩はお赤飯が食卓に並んだ。

弟の大知^{だいち}はなんだか判ないまま、おいしそうに赤飯を頬張る。

あたしは妙に複雑な気分で、お父さんには何となく知られたくないような気がしたし、それよりもなによりも、慶太に初潮の真っ只中を目撃されたショックを消せなかった。

一番仲のいい男子に、子供から女になる瞬間みたいなものを見られた気がして、艶の在る小豆を見つめながら、明日は学校は休んだ方がいいだろうな。なんて思ったりした。

去年の夏休みに、庭の片隅でサナギからムクムクと起き上がって出てくるアゲハ蝶を見た事が在るけれど、それは何にも抗えない無防備な姿でとてつもなく切なかった。

指で弾かれるだけで吹き飛んでしまうような、なんの防御もできない脆弱な姿……あたしはきっとあの時、そんな姿だった。

脆弱で無防備な姿を見られるのは恥ずかしいし、辛い、悔しい。

夕食を終えて、明日はどうしようかと考えながら、ただテレビの画面だけを眺めていた。バラエティー番組に笑う弟の声だけがやたらと耳に響く。

夜の八時過ぎ頃、突然玄関のチャイムが鳴った。

母親が茶の間を出て行くのを目で追いながら、やっぱり明日の事はかり考えた。

腹痛は酷くなかった。この頃は二日目と三日目が酷かったような気がするけれど、それで学校を休んだ事はないと思う。

母親が玄関に出て、直ぐに茶の間に戻って来る。

「ヒナ、お友達、慶太くんよ」

「えっ……」会いたくない……。

なんで慶太が来たんだろう。

なんの用だろうか……女に変化し終えたあたしの姿に、何か代わり映えがあつたか逸早く見に来たのだろうか？

アゲハ蝶と違って、あたしの見た目は何の変化もありはしないのに。

当然のように、慶太の両親とあたしの両親も親睦があつた。だから、慶太が家に来る事はそう珍しくも無いけれど、やっぱり今日は来ないで欲しかった。

あたしはゆっくりとした動作で玄関に向って歩いた。アゲハ蝶というよりも、芋虫だ。

出来れば玄関に辿り着く前に、慶太に帰ってもらいたい。

でも、どんなにゆっくり歩いても、茶の間から廊下に出れば玄関まで数メートルしかない。

あたしが廊下に出ると慶太は玄関の中に立っていて、白熱球の淡い山吹色の明かりに照らされながら、なんだか少し気まずそうな笑顔くれた。

何時もの何も考えて無いガキの笑顔ではなかったから、彼が興味本位だけであたしを観察しに来た訳ではないのだとわかった。

なんだか胸の奥で心臓がキュンとしぼむような、奇妙な感覚に襲

われる。

「だ、大丈夫だったか？」

玄関の慶太と廊下のあたしは丁度目線が同じくらいだった。

「うん……平気」

さすがに帰ってからジーンズに履き替えていたあたしの細い脚を、慶太は少しだけ見つめる。

「なんか用？」

できるだけ何でもない素振りで、それでもだいぶ粗雑な言い方をした。

「あ、あのさ……姉貴に聞いてさ……」

慶太には五歳年上のお姉さんがいる。五歳上と言えば15歳の中学三年生。当時のあたしから見たら、プリーツの入った紺色の制服を着る彼女は胸もあって立派な大人の女だ。

慶太はモジモジして彼らしくない仕草で小さな紙包みを取り出す。

「な、なに？」誕生日はまだ先だよ。

無造作に包みを受け取って中を覗き込む。

違った……一瞬ギョツとして目が点になった。

慶太があたしに差し出した紙包みに入っていたのは、なんと生理用品の小さなパッケージ。コンビ二で売っているような、割高の一番小さな包み。

「な、なによ。いやらしい」

「そんな事ねえだろ。大人になった証拠だ。姉貴が必要だって言うから……」

慶太はそれを自分で買ってきたのだろうか？ それともお姉さんの未開封のストックをパクって来たのだろうか？ それは訊けなかった。

それに、誰にも言うなっって言っただのに、彼はお姉さんに話したのだと、この時は考える余裕もなかった。

でも、もしかしたら慶太も、あの日あたしと一緒にちよっぴり大人になったのかもしれない。

あたしは彼から受け取った紙袋の口をくしゃつと上から掴む。
耳が熱くなった。

「ありがとう」

思わず言ってしまったけれど、なんかへん……。

彼とは翌日から、何事もなかったように仲良く過ごした。

相変わらず教室ではオバQって呼ばれたけれど。

慶太はあたしの事を学校では誰にも言わなかったから、あたしに月のモノが訪れた事を知っているのは一部の仲の良い女子以外、男子では彼だけだった。

第3話（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
引き続きお読みいただけたら幸いです。
宜しくお願いいたします。

第4話

中学に入ってから、麻野慶太とは仲がよかった。

その頃少し優等生だったあたしは、やんちゃな部分を増した慶太とは不釣り合いな関係に映っていたらしい。

あたしと言えば、彼の気持ちと自分の気持ちもよく判らないまま素直になれなくて、常に近くにいるのにすれ違っているような歯痒い思いをしていた。

そんな彼の想いを知ったのは、彼と別れる直前だった。

別れと言っても、もう絶対に会うことの出来ない永遠の別れ。

ぴーかんに晴れた暑い夏の日だった。

局地的豪雨ってやつらしいけれど、あんな数分で河が氾濫してしまっなんて、その場にいた誰も思わなかったと思う。

あたしの通っていた中学では、夏休み初日から2日間に及ぶ林間学校が恒例で、周囲には他の生徒や引率の先生もいた。

真夏の炎天にあぶりだされた緑の中で、野外炊飯やオリエンテーリング、キャンプファイヤーなど、スケジュールは埋め尽くされている。

「慶太、これあげる」

1日目の午後、女子は家庭科授業の延長のようなプログラムでカップケーキを焼いた。それは男子や引率の先生たちみんなに配る為のモノなのだけど、あたしは自分が焼いた分の数個を慶太の分として特別にキープし、袋に詰め込んでいた。

「あ、ああ」

慶太は少し素っ気無く受け取った。

西日が木立をすり抜けて、眩しい陽だまりの中に緑の日陰を作っていた。

「べ、【別にアンタのために作ったわけじゃないよ】。みんなにあげる為だかね」

「そんなの知ってるよ」

慶太は少し焦げの在るカップケーキを無造作に口へ入れると、紙パックのコーヒーマルスをゴクゴクと飲んだ。

「おいしい？」

「あ？ ああ。まあまあかな」どうしてもよさそうに言った。

あたしは少し機嫌を損ねて

「あつそ」と素っ気無く彼の傍を離れた。

この日の夕方、あたしにお客さんが来た。どうしてもこんな時に限って予定が重なってしまうのか……。非常に厄介なダブルブッキングってやつだ。

この頃はすでに初日がいちばん重かったから、あたしは予定を読んで必ず痛み止めを持ち歩いていた。

それなのに、カバンを漁ると何処にも無い。この日に限って机の上に忘れてきた。

引率の教師に言ってみたけれど、渡されたのはバファリンの錠剤。半分は優しさで出来ているというバファリンが、あたしは効かない。どうして効かないのかは謎だけれど、近所の薬局で処方してもらうセデスじゃないと効かないのだ。

でもこの頃は確かに、初日の痛みも薬で抑える事は出来ていた。

宿舎の廊下をトボトボと歩く。痛みはどんどん増してくる。効かない事を知りながらバファリンを飲むのも気が引ける。

あたしはバファリンの2錠くつついたアルミシートを握り締めて、憂鬱になった。

廊下の角から人影が見えて、ハッと立ち止まる。慶太だった。

「薬、忘れたって？」

「……うん」きつと、美智に聞いたのだ。

慶太は黙ってグーの手を前に突き出してから、あたしの目の前でそれを開く。

小さな袋入りの白い顆粒……セデスだ。

「な、なんで？」

「別に。たまたま持ってた。これしか効かねえって前に言っただろ」

そう、慶太には前に話した事があった。

実はセデスを飲むようになったのは、やっぱり生理が重い彼のお姉さんの薦めだったから。

アイツはもしかしたら、いつも予備の薬を持っていてくれたのかもしれない。

「別に、お前のために持ってたわけじゃねえからな」

慶太は棒立ちのまま、無関心な素振りで言う。

あたしは無言で頷いて薬を受け取った。黒髪が頬をくすぐる様に揺れると、なんだか胸の奥まで少しくすぐりたい。

ありがとう。て、言い忘れた。

おかげでその夜は無事に過ごす事が出来た。

第5話（前書き）

最終話です。

ごゆっくりお読み下さい（＾＾）

第5話

二日目の午前中、あたしは美智といっしょに河原で膝まで水に使って遊んでいた。陽射しで光る水の中には、小魚や沢蟹がうろついていた。

昨夜始まったあたしの二日目も、初日さえ乗り切れば痛みはほとんど無くなる。

野外炊飯の準備が整った束の間の自由時間だった。周囲には他の生徒もいたし、引率の教師も岩の上で陽をあびながらタバコを吹かしたりしていた。

そんな時、とつぜん上空を暗雲が埋め尽くす。水面に映った自分の姿が雲の陰で消えた。

雫が落ちて来て、それはあつと言う間に視界を遮るほどの雨に変わった。

顔を上げると周囲に喧騒が沸き起こり、河原にいたみんなは木陰へ移動していた。

川に浸かっていた生徒は少し焦っていて、転ぶ娘もいた。

教師が何かを叫んでいた。きっと、水から上がるように促していたんだと思う。

その声さえも、駄々降りの雨音にかき消される。

世界の終わりみたいな豪雨の中で、あたしは何故か慶太の姿を探していた。

美智はあたしの腕を掴んで一緒に川から上がろうとしていたけれど、僅か数分で川の水は腰の辺りまで増水した。

遠くに見えた慶太の姿は、遮られた視界に飲み込まれるように消える。

美智が転んだ。

あたしは何がなんだか判らなくて、美智を引きずるように助け起

こす。でも、今度はあたしが転んだ。

川底から足が浮いた瞬間、あたしは美智と離れ離れになってしまった。

目の前に映るのは、川面に叩きつけられる水の波紋の群れだけで、あたしは息をするだけが精一杯だった。

溺れる……………。

それは初めて感じる水に対しての恐怖だった。

水の中の身体は異常に重くて、ただ流れに飲み込まれるだけ。

もう誰の姿も目には映らなかった。

遠くで人の声がしたけれど、気のせいのようにも感じた。死の恐怖はあたしの身体を蝕んで、骨が冷たくなってゆくを感じる。

でも数分後、豪雨で視界が霞む中、氾濫した川に溺れたあたしを見つけ出して救ってくれたのは、麻野慶太だったのだ。

何も見えるはずの無い世界の終わりで、彼だけがあたしを見つけ出してくれた。

水を飲んで朦朧として大きな石にしがみ付いていたあたしを、彼は背負うようにして川岸まで運んでくれた。

意識が朦朧としていたから、無我夢中で慶太にしがみついていた。「大丈夫だ。楽勝だ」って、アイツは何度も言った。

濡れた体操着は重くて冷たかったけれど、しがみついた彼の身体から熱い体温が伝って、何故か不思議な安堵を感じた。

でも、病院のベッドで目が覚めた時、優しく見つめる先生の瞳に涙の痕がある事に気付いたあたしは、自分でも知らないうちに泣いていた。

慶太が犠牲になった事は後から聞いたのだけれど、この時あたしは何故か認識してしまったのだ。

それはきつと、何時も何処かにある彼の気配が、何処にも感じられなかったからだと思う。

局地的豪雨の極端な事故として、新聞やニュースに取り上げられていたのを覚えている。

これらが、毎月あたしを憂鬱にさせる記憶のすべてだ。

消したくても消す事が出来ない……ほろ苦いというのにはあまりに残酷で切ない哀切。

それは、高校へ入って髪を明るいつ茶色に染め、両耳にピアスをあけて爪にネイルを着ける今でも、やっぱり変わらない。

あたしは揺れるバスの一番後ろの席で背もたれに寄りかかったまま窓を少し開けた。

湾岸線の向こうから吹き込んでくる初夏の汐風が少しだけ心地いい。風に乗って聴こえる鳥の声に思わず虚空を見上げる。

ぼんやりと眺める遠くの空に、海鳥たちの群れが小さな点になって見えた。

停車したバスのドアが、プシューっと音をたてて開くと、早退組みか休講か、他の学校の制服が三人バスに乗り込んでくる。

いつの間にか入り口付近に座っていたお婆さんの姿は消えていた。走り出したバスの騒音にあわせた様に、乗り込んできた連中のお喋りは大きな喧騒になって車内を埋め尽くす。

あたしは溜息をついて、再び窓の外を眺めた。

次第に深まる下腹部の憂鬱とは裏腹に、広がる蒼は眩しいほどに清々しい。

カバンから薬を取り出すと、今では効かなくなったセデスの白い顆粒を眺めてみる。効かないと判っていても、いまだにそれを持ち歩いている。

陽射しを受けた真っ白な粒子が、カラコンを着けた虹彩に弾けて、無意識に眼を細めた。

真紅に染まる事を知らない小さな帳は、目的を失い今でも時を止めている。あたしが子供から女になったあの日、彼から貰った小さな包みは未だに未開封のまま部屋のクローゼットの中に在る。

たぶん一生開けることはないだろう。

あたしと慶太が一緒に大人になった証が、消えてしまわないように……。

きつとあたしは、サナギの抜け殻から這い出せず枝にしがみついたまま、未だに大空へ羽ばたくことをしない、アゲハチョウ。

END

第5話（後書き）

通常、女性視点の一人称はあまり書かないのですが、これは企画作品と言う事もありあえて使わせていただきました。
最後までお読み頂き、有難う御座います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1065k/>

Swallowtail Butterflyスワロウテイル・バタフライ

2010年10月8日14時46分発行